令和元年度指定
地域との協働による高等学校教育改革推進事業 （グローカル型）

『奈良発！未来を創造するグローカル・リーダー育成プログラム』

奈良県立畝傍高等学校
令和4年1月20日（木）

発表の流れ

１　第２学年「課題研究」に関わる取組

・経緯と目標

・運営　～教員の「目線」合わせ～

・第１学年の取組

２　コンソーシアム各機関及び地域との協働について

３　成果と課題

Ⅰ-Ⅰ 第2学年「課題研究」に関わる取組

SGH事業終了時の検証を踏まえて
①主体性？
②教員の体制？

⇒グランドデザイン策定（学校教育目標と照らし合わせる）
「俯瞰力」
⇒ルーブリック敷設（生徒と教員が目標を共有する）
「B」を基準に3段階評価
⇒教科を超えた体制づくり
月2回程度の「課題研究」授業担当者会議の実施
教員は「伴走者」、持続可能な体制づくり

１-２「課題研究」において本校が重視するもの

（１）生徒の主体的な研究課題設定

（２）課題に迫る過程の充実

「新しい成果」＜「新たな問い」

⇒ 成果そのものよりも多くの経験を積む過程を重視

１年間を振り返り、「自分は何を学んだのか」

「次にどうするのか」を自分の言葉で語らせることが

キャリア設計につながる。

（令和２年２月１２日職員研修資料）より

1-3　第2学年「課題研究」(2単位)

(1) 1人1テーマ　自分の関心領域から「問い」をたてる
　課題解決型、価値創造型

(2) 自分なりのものの見方＋ 動機 ＋理由（客観的根拠）
　（×ひとりよがり）

(3) 自分事として考える、自己のキャリア設計へ
　（×別世界　×課題研究が目的）

(4) 問いを具体化させる過程における豊かな視点
　（共時、通時、地域　等）

(5) 振り返り　＋　フィードバック
　（自己評価、他己評価、意識調査）

Ⅰ-4　課題研究講座編成

＜講座イメージ＞
下線部は昨年度も担当者

講座①	国語科	A先生
	数学科	B先生
	芸術科	C先生

講座②	保健体育科	D先生
	地歴公民科	E先生
	理科	FGH先生

１-５　LHRや学校設定科目等を活用した第１学年の取組

（１）日常の気づき（当たり前を疑う）

⇒「気づきノート」作成、活用

※BYODの導入を視野に今後の活用を検討中

（２）「探究」に関わるオンライン講演会の実施

⇒　生徒、教員で目的の共有

（３）「課題研究へのアプローチ」（夏休み学年課題）

⇒　次年度実践に向けて最初のステージ

（４）　出前授業実施（１２月）

⇒　コンソーシアム機関及び地域NPOやベンチャー企業との連携

⇒　ものの見方・考え方を鍛える

2　地域との協働

ローカルとグローバルの視点をもった先駆者に学ぶ
⇒実際に体験、体感（生の声を聞く）

・株式会社ATOUN代表　藤本弘道氏
（「着るロボット」の開発に関わる講演会～奈良でベンチャーを興す意味～）
・『アート思考』著者　末永幸歩氏（「アート思考」に関わるオンラインワークシップ）
・Design Setta Sango（「雪駄」を世界のスタンダードにする取組 企業・工房訪問）
・株式会社ペーパル（廃棄米から作る新素材「kome-kami」に制作に関わる取組　企業訪問）
・株式会社NEXUS代表　反田恭平氏
（講演会～奈良でオーケストラを設立する意味～）

３ 成果と課題

〈成果〉

①ルーブリックに基づく指導計画の敷設

②生徒の主体的なテーマ選択及び研究課題設定

③自然科学分野の課題研究の開始⇒「理数探究」へ

④コンソーシアム機関や地域との連携の強化

〈課題〉

①教員の「伴走者」としてのスキルアップをどのように図るか

②「課題研究」と各教科の授業内容をどのように接続するか

③「課題研究」を地域にどのようにフィードバックしていくか

④グローバルな視点を育成する機会の創出